



Contents

- ・【巻頭エッセー】音楽家の性分…永峰高志 ●表紙
- ・【研究発表会】Parade 100年前の衝撃を再び ●2～3
- ・図書館員のノートから
参考図書のご紹介 ㊟…樋口真規子 ●4
- ・資料の館 ㊟…森岡倫子 ●5
- ・館長室へようこそ ㊟…古川聡 / 雑誌の部屋 ㊟ ●6
- ・【私のおすすめ】…關奈々子 宇田川もも ●7
- ・Information ●8

Parlando

ぱるらんど 「語りかけるように歌う」という意味の楽想記号です

No. 297

【巻頭エッセー】音楽家の性分

永峰 高志

四月吉日、図書館委員を拝命しました。小学校から今に至るまで学級委員、生活委員、放送委員など様々な委員を経験してきましたが、ただの一度として図書委員というものになったことはありませんでした。元々本を読むことが苦手で、小学生の頃から図書室へ行って本を借りたり調べ物をした事も殆ど無く、私にとって最も縁遠い世界が本、図書の世界。最も遠い場所が図書室でした。今まで図書委員になったことが無いというのは、至極当然な成り行きだったのです。

しかし、この歳になっても音楽家の性分からか、何事も経験!と思ってお引き受けした次第です。

図書館自体も私にとっては特別な場所、神聖な場所というイメージで、おいそれと気軽にちょっと調べ物で訪れるにはハードルが高い場所でした。

しかし、先日この就任を機に思い切って図書館に行ってみました。美しくリニューアルされた神殿のような建物の石段を緊張感を味わいながら上がって行き、職員証を機械に通して中に入ります。本来ならロビーに設置されているコンピュータを「カタカタッ、パパン!」と目にも止まらぬフィンガリングで操り、自ら検索かけられるとカッコ良かったのですが、ちょっと? 実力不足なのでカウンターの職員さんに尋ねることにしました。「モーツァルトの弦楽四重奏K.387の自筆譜ファクシミリありますか?」

物の数分でお目の楽譜が出てきました。国立音大の図書館は東洋一の蔵書を誇っているので当然の事でしょうが、やはり実体験すると「これは凄い!」と思います。

昨今、一つの楽曲が色々な出版社から出されています。参考資料が複数あり演奏の方向を決めるのにとっても参考になっています。

原典に忠実なベーレンライター版、ヘンレ版、ブライトコップ新版これらの楽譜を参考にしなさい、それ以外はあまり信憑性が無いから使わないように、と言う人が最近結構います。私はそれが正しいかという少々疑問に感じます。

先ほどのK.387は、有名な「春」と言われている曲ですが、その第二主題の音符5つに音を短くする記号が付いています。それが・(点)なのか◦(楔<<さび>)なのか…実は版によってまちまちなのです。なぜそんな事が起きるのか? 原典に忠実とされる版でも、楽譜に起こす時には必ず監修校訂する人がいます。違いはその人の解釈なのです。自筆ファクシミリを見ると、私には問題のフレーズはどの音符にも同じように「(縦長のスタカート)がついているようにしか見えません。

演奏家の性分^{イデオロギ}で楔と点は明確に弾き分けます。一般的には楔の方をより意味深に(結果長めに)演奏します。これについては正反対のことを言う人もいます。ややこしい! 何れにしても楔と点の違いでかなり違ったニュアンスになります。

大切な事は、ただ忠実に弾くのではなく、監修者の意図を読み解く事だと思えます。自筆譜も見て考える事で、自分なりの解釈も持てるようになり、説得力のある演奏に繋がると思えます。

これからはハードル高くとも足繁く図書館に通い自筆譜を含め、色々な版、文献を見て演奏に生かそうと思えます。音楽家の性分! ●ながみね たかし 本学教授(ヴァイオリン)